
異世界の俺の生きる場所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の俺の生きる場所

【Nコード】

N0087Z

【作者名】

一

【あらすじ】

高校2年生の岩元昌也はある日、金髪の美女に誘われて異世界に連れてこられる。

そこには魔法や剣があり、ついには魔物までもがいた。

そこで、生きるために昌也が進んだ道とは・・・

主人公最強ではありません。また、主人公がハーレムを作ることもしりませんのご了承ください。

いつか題名を変えます

初投稿ですので、誤字脱字、文章の幼さが目立ちますが、お許しください。

0 話（前書き）

これは初投稿作品ですので、温かい目で見守ってくれると嬉しいです。

ものすごい下手ですが、最後まで読んでくれると嬉しいです^^

0 話

俺の名前は岩元昌也。とある学校の高校2年生だ。頭は・・・いい。だが、それも意味はなくなつた。

なぜなら今俺は異世界に来ている。いや、連れてこられたというほうが正しいだろう。

自分も実際何が起つたか理解に苦しむ。辛うじて分かるのは自分が違う世界に来たということだ。

「マサヤ君？」

誰だ？ そうだ、俺をココに連れてきた人だ。

女性で髪は金髪で肩あたりまでの長さだ。そして綺麗だ。

なぜこんなことになっているかというところ、ある日、高校からの帰り道、俺はこの女性に声をかけられた。

「君、違う世界に行つてみない？」

唐突すぎた。3秒ほど頭の整理に使った。日本に金髪の美女がいることも不思議だが、俺はあまり深く考えなかった。冗談だろうと思いつながらその人があまりに綺麗だったので、行けるなら行きたいと答えてしまった。そしたら、

「じゃあ決まりね。あなたに関する記憶はマスターに頼んで、この国から抹消しておくから。」

オイ待て。マジで？

暗い路地にもものすごい力で引き込まれ、金髪が何か唱えると、黒色のどこでも。アに似たものが出てきた。もう逃げれないと思った俺は、その中に・・・入った。

中は真っ白だった。10秒ほど歩くと出口が見えた。出ると、砂漠。そして目の前に20メートルはあるかという門。

俺はただただ口をあけるしかなかった。そんな時、金髪が、

「君、名前は？」

と言う。

「岩元昌也です。」

「聞かない名前ね。あ、違う世界かw」

ふざけてるのか？と思いつつ、名前を聞き返した。

「メアリーよ。」

「すいません、メアリーさん。ここはどこですか？」

「ここはミリシア。私はとある集団の一人でね、今回私はここに依頼で来てるのよ。」

・・・俺なんで呼ばれた？

「今回の依頼はちよつと一人じゃきついから君を連れてきたってわけ。」
なるほど。

「君はみたところ魔力が多そうだったから来てもらったわ。あつ、そつだ、この石に触れて。」

そこには黒い石。俺は手に乗つけた。すると石は、光りだした！という反応はなく、黒いままだった。

ちよwこれ大丈夫w？

「ええ？！多いのは魔力だけ？？でも属性はある・・・」

やばい？これやばい？

ずっとメアリーさんが黙っているの、たまりかねて声をかけた。すると

「君は魔力量が普通の人より多い。けど、魔術を使うのには適していない。」

え、それって結局ダメじゃんよ。メアリーさんよ。

「しょうがない。君には体術を仕込むわ。依頼の期間は2週間。今

から5日間であなたには基礎を教えるとするわ。いいわね？」

その後の説明によると、俺は魔力を具現化する能力が低いらしく、魔力によって、肉体強化するしかないという。だが、そのうち少しは魔術も使えるようになるだろうと言われた。それならいいかなと、承諾した。

とりあえず、町に入ろうといわれたので門を抜け、民宿のようなところに入った。

町は広がった。ものすごい。こんなところで何するんだろ、と思った。

その後、特訓が始まった。最初は魔力を感じるという訓練だった。「神経を集中すると何か流れてる気がしない？こつちの世界なら君は間違いなく感じれるはず。」

右手に神経を集中した。確かに温かいものが流れている気がした。

「あとはイメージしだいよ。それを手全体に広げてみて。」

イメージ・・・してみたがさすがに無理だった。

今日はずっとコレを繰り返えすらしい。

4時間後、ずっと俺はがんばってたのにメアリーさんというと風呂に入り、飯を食べ、テレビを見て爆笑している。

クソ野郎、いつか見てろよ？

そんな俺も、魔力を広げられたらしい。力の入り方が違う。

「できたっ！」

「ふーん、じゃ次は足ねー」

足もすでに終わっていた。

常人より少し早いスピードでメアリーさんの前に立った。

「あら、早いわね」

「ちょ、メアリーさん適当じゃないすか？」

「メアリーさん？違うわ、師匠よ。」

どうでもよっっ！！

「まあいいわ、今日はコレでおしまい。明日は本格的に行くわよ。もっと上手くなればここまで・・・ほら！」

ええゝ早すぎゝw

その夜

悔しかったからかメアリーさんが寝たのを確認し、ずーっと、自分で訓練していた。

「あの子、以外にがんばるわね。私も教えるなら私を超えるくらいに育てなきゃね。」

おきていたのかメアリーはこう小声でつぶやいた。

1話

目が覚めた。ああ、そうだ。ここは異世界。もう俺に帰あよびる場所はないんだった。

母さん、何してるかな。父さん、仕事クビになってないかな。

学校の友達、祖父母、親友、前の世界のあるゆるものが頭に浮かんだ。

昨日までは何もなかったのに、今日になってさびしさがこみ上げてきた。

でも、もう遅い。ここで生きるしかないんだ。

そう思いながら、体を起こした。

涙が出てきた。

「マサヤ君、起きた？」

メアリーさん、いや師匠が呼びかけてきた。

とっさに涙を堪え、拭く。そして

「はい、起きてます」

と答える。

もうこうなったらここで生き抜いてやる。

「今日は何やるんですか？」

「ええ、今日は買い物よ」

一瞬で緊張感が抜けた。

だって、本格的つつつたのに買い物だよ？

「まずは服。そして食料、あとはまあ安い武器かな。」

服、あ、学生服やんけw

今更ながらここだと超恥ずかしいw

で、ここは民宿？を出て15分ほどあるくと商店街についた。ここはある程度のものなら何でもそろっているらしい。

まずは服だが、ここでは、ドラ。エの村人のような服が一般的だった。ということ、後は、ご想像にお任せします。

師匠もこんな感じだ。

店の裏を見ると、黒とも濃い青ともいえる物体が動いていた。すぐに居なくなったので、気のせいだろうとあまり深く考えなかった。

「ところで師匠、依頼って何ですか？」

「何言ってるのよ、あなたまだ戦えないじゃない。」

戦うのかいw

食料市場にて・・・

前の世界の食べ物とほとんど同じだった。

俺は師匠の買い物を見守りながら、何作るんだろうとワクワクしていた。

ここでもさっきの物体を見た。けれどまた気にしなかった。これがあとあと関係してくるとは、昌也は思ってもいなかった。

続いて武器屋。

剣やら杖やら槍やら・・・もう何でも揃っていた。

使えなさそうな枝まであった。

「そうねえ、マサヤ君には体術を極めて欲しいから、この銅い籠手にしようかしら。」

銅は魔力を比較的通しやすいらしい。もっと上質なものもあるがらしいが。

「まあ、今は戦力にもならないし、これにしようか。」
酷い、傷ついたw

「さあ、買うもの買ったし、帰ろうか？」

「はい、そうですね。」

昌也とメアリーは、商店街を後にした。

一方さっきの商店街の裏では
黒っぽい青っぽい物体が増殖していた・・・

そのころ、民宿に戻った二人はこんな話をしていた。

「マサヤ君、私はある集団に所属しているといったでしょ？」

「はい、それが？」

「これから行動を共にする上で知らなきゃいけないこともあると思うの。今から君にはその話をしようと思うわ。」

「分かりました。お願いします。」

「私の名前はメアリー・ティーフ。フィアラルという組織の一人よ。メンバーは私を含めて7人で、剣使い、銃使い、魔術使いとか、とにかくいろいろいるわ。」

おかしい。俺、どうみても必要ないw

2話

おかしい。俺、どうみても必要ないw

「何故俺を？ 必要ないじゃないですか。何か少数精鋭っぽいし。」

「言ったでしょ？ この依頼は一人じゃ無理なの。君の力が必要なんですよ。」

「はあ、本当ですか？」

「本当よ？ 信じなさい。」

意外と疑い深いわね・・・

その後、3日目、正拳突きなどの基本技

4日目、魔力を流しての基本技

5日目・・・師匠との組み手

「全力でかかってきなさい？」

「はい！」

まずは深呼吸。相手の表情、呼吸、予備動作を全神経を集中して観察する。まずは俺が左足を出し、右の正拳。メアリーさんは軽々かわし、左手で俺の右腕を引っ張り、その勢い右肘を俺の胸に入れようとする。俺はそれをギリギリで右にそれてかわす。

冗談じゃない。強すぎる、洒落にならない。

今度はメアリーさんが動く。右手が動いた、と思ったとたんに左手が動き、正確に俺の腹部を捉えた。

俺は思わず悶絶した。

「なかなかいい感じに魔力をコントロールしてるけど・・・まだま

だね。あなたは攻撃を防がれることを考えていないわね、それで力ウンターを食らう。次からは気をつけるといいわ。」

「ううう・・・」

そのまま丸一日が過ぎた。俺もだんだんと慣れてきた。

でも、やっぱり強すぎた。一回も勝てない。明日から俺も参加だつてのに・・・

「今日はもういいわ。ほんとに100分の1ぐらいしか教えられなかったけど、明日から仕事よ、今日は早いけどもう寝なさい。」

「はい、おつかれさんした〜。」

大丈夫だろうか。

依頼ってどんなのだろ、今までの修行からして、戦うよね・・・

一人不安を抱える昌也であった・・・

3話

「おはよう、マサヤ君。じゃあ、まずは依頼の説明ね。この街にベビードラゴンといわれる魔物が大量発生してるの。ドラゴンじゃないわよ？でも、集まるとほんと厄介だから君にも手伝って欲しいの。」

「手分けして倒そうということですか？」

「そうよ。それでこれを・・・」

マサヤは携帯？をもらった。これで連絡を取り合つらしい。

「分かりました。じゃあそのベビードラゴンの特徴を。」

「全体的に黒っぽくて、何がなんだかよく分からない生命体よ。一匹だと大して強くないけど、集合するとドラゴンのように大きくなる。それが一番厄介なのよね。」

アレじゃん。 なっちゃうヤツじゃんw

「これから一週間、君と私は聞き込みを行う。だけど、ベビードラゴンの集合が近いようならば今にでも動く。だけど、ソレらしい情報・・・」

「「「「きゃあああ！！！」「」「」」

「「「！！」」

「早すぎよ・・・どうなっているの？まあいいわ。とにかく来て。」

誘われるがままに現場へと駆けつけた。

そこには、ボーリング球ほどの黒っぽい物体が2つ。・・・コレか。

「ちょうどいい。マサヤ君、見てなさい。」

メアリーは足に魔力を流した、きれいな足だなくなんて見とれてみると、そこにはもうメアリーはいなかった。

そして、黒い物体が水平に飛んでいた。

メアリーが蹴ったのだ。昌也も早すぎて（集中してみていなかったが）捉えられなかった。

その魔物は、泡のように消えていった。

俺もやってみよう。

幸い魔物は弱い、師匠同様、足に魔力を流し込み・・・一気に距離を詰め、蹴り飛ばした。

まだ死んでないらしく、もがき始めた。そして、分裂した・・・

「マサヤ！早く！そいつらは10体集まると・・・」

周りから魔物が5、6体現れた。一点に集まりグニョグニョと蠢いた。グロイ・・・

そして、人一人ぐらいの大きさになった。ほぼ球体だが。

「くっ！マサヤっ、行くわよ！」

「は、はい！」

メアリー、魔物の目の前に移動し攻撃を繰り返そうとしている。明

らかにあせっている。

魔物から何本もの手が現れた。メアリーはとつさに退いた。

しょうがないわねえ。とつぶやいたのが聞こえた。メアリーの手が燃えていた。魔術である。

一気に距離を詰めて2発、3発、4発と攻撃を繰り返して、退く。

魔物の5分の1が削られた。だが周りから魔物がウニョウニョと寄ってくる。

昌也はその魔物を迎撃する。だが、間に合わない。
10体集結した・・・

一瞬で巨大化した。15メートルはある。黒い竜だ。
メアリーさんは冷静になっていた。

「マサヤ君、私、ちょっとだけ本気出す。」
と言うといきなり雰囲気が変わった。

魔力の量が大幅に増加したのが一目で分かる。

「いくわよ・・・ヴォルカランス。」

目の前に、炎でできた槍が現れた。ソレを手に取り、まず、集合していない魔物を焼き払った。

「すごい・・・」

マサヤは思わずつぶやいた。

そんな中、ドラゴンは分裂しようとしていた。

「させないわよっ！」

槍が一気に10メートルぐらいまで伸びた。

そして、頭を切り落とした。切り落とされたほうの竜は消えた。
だが、分裂した方は生き残っていた。

「マサヤ！あなたがやりなさい。」

槍を俺に向かって投げてきた。

「大丈夫！君にも火属性があるから！」

槍を受け取ったとき、槍の炎がさらに激しく燃えた。

「！」

今の俺ならやれる。

一気に腹部に接近、黒い手が伸びてきた。

「くっそ！」

槍ではリーチが長すぎる。一回手放し、手と足を駆使し、すべて落とした。

そのとき、手足が光ったように見えた。だが、気にしない。すぐさま槍を拾い、腹に突き刺した。どんどん赤くなっていく。

それを引き抜き、腹の下を潜り抜け、しっぽを切断する。軽い。振り向きざまに、槍が伸びた。意思を反映するらしい。翼を落とす。

「グググオオオオオオ！！！」

もはや竜ではない魔物の頭部めがけて槍を投げつける。

音はなかったが、命中したようだ。頭のほうから泡のように消えていく……

勝った。できた。

槍は消えて、力が抜けた。膝から崩れ落ちる俺を、師匠が支えた。

気づいたら、さっきの民宿だった。寝かされている。

「起きた？」

声が出ない。

「起きたようね。君は魔力の使いすぎでこうなってる。そのうち良くなるわ。」

「ありがとうございます。と首を軽く曲げる。」

「それにしても驚いたわ。あなた意外とやるわね。じいさんが目をつけただけある。」

「じいさん？誰だ？」

「まあかなり早く依頼は終わったけど、まずは休むといいわ。そしてたら帰るわ。」

「あ、あと君のことだけど、君は、火、雷、氷、土の属性がある。多いわ。そのうち、使いこなせるようになる。そして、君はおそらく、魔力が多いだけではない。何かある。まだ分からないけどね。」

「もしかして、さっき光ったヤツか？」

「瞼が重くなってきた。もういいや、考えるの面倒くさいわ。俺は意識を手放した。」

「なんなの？この子。もはやセンスの塊よ？」

「じいさん、やっぱりあなたの目は狂っていなかった。私はこの子を絶対連れて帰ります。」

「マサヤの未来を創造しながら、メアリーも眠りについた。」

4 話

「マサヤ君、準備はいい？」

「okです。」

「じゃあ、フィアラルへ行くわよ。」

「はい。」

疲れは全部取れたわけではないが、そのフィアラルというものが楽しみだったので、早く出発することにしてもらった。
ここからだと言約三日かかるらしい。

・ ・ ・ ・

帰り道の砂漠にて

「すみません、この前のようにドアみたいなヤツはださないんですか？」

「あれはとても魔力を使うのよ。あれは2週間ぐらいしないと使えないわ。わざわざ君のために使ったのよ？感謝しなさいよ。」
「言わなきゃ良かった。」

「それにしてもおかしいわね・・・あんなに早くベビードラゴンが集合するなんて・・・」

俺はまったく知らないのなんとも言えないが、とにかくおかしいらしい。

「君の魔力が関係してるのかしら。」

「それじゃあ俺、厄介者じゃないっすかw」

「普通はありえないんだけどね・・・」

ほんとに俺か??

「そろそろお腹がすいたわね。はい、干し肉。」

硬えー、しかもしょっぱい！

「うう・・・」

「ちよつとしっかりしてよ。これからの主食はコレよ?」

これから三日間、こんな生活か・・・

「ふいあたるって何ですかね。」

「フィアラルは、小さいけどギルドよ。でも、皆が強すぎて、誰も入らないんだけどね。」

「それで今回も依頼ってわけですか。」

「ええ、そうよ。でも本当の目的はそこじゃない。君を連れてくることよが本当の目的よ。」

俺？

「フィアラルの長、フォーレルニアっていうんだけど、君の事を見つけて、私に連れてこいって言ったの。」

「そうなんですか。でも俺なんかでいいんすかね。」

「じいさんの目は間違ってたわ。君には素質がある。私にも感じるもの。」

正直、にやけてる。隠せないから下を向く。

「マサヤ君、家族のこととか、友達のこと思い出さない?」

いきなり聞かれて正直驚いた。しかし、思い出すに決まってる。

「実は、君の前にもう一人そういう子がいるのよ。君は覚えてないかもしれないけど、その子は君の事をしっかり覚えてる。」

そういわれた瞬間、頭の中では、たくさんの情報が飛び交っていた。

昔の友達？

そういえば、何か普通の日常で違和感があつたような・・・
親友だったりするのかな？

しかも強いのか？

「名前は何ていいますか？」

「思い出して頂戴ね。ユウトよ。」

ユウト、ユウト、優斗・・・優斗！

神埼優斗だ！

「思い出しました。俺が、あいつを忘れるなんて・・・」
「しょうがないわ。じいさんの魔術はどれも強力よ。」

でも、優斗がいるとだけで、どんなに心強いことか。

「会いたい？」

「もちろんです！」

「じゃあ早く帰りましょう。」

「はい！」

優斗、今何してるんだ？

5 話 影

出発から2日が過ぎ、あと丸一日歩けば到着らしい。

すごい疲れた。足が棒のようとはこのことを言うのだろうか。

メアリーさんの足はほんとに棒のようなのに彼女自身はピンピンしている。こんなアリだろうか。

「はい、干し肉。」

「どうも。」

慣れというものは怖いものだ。あんなにまずかった干し肉が今は何ともない。

それはさておき、遠くに1つの黒い物体が見える、なんだろう。

「マサヤ、魔物が異常な行動を見せた理由が分かったわ・・・」

「えっ、何ですか？」

「あの人影よ。あれが真犯人ね。」

「何ですかアレ。」

「アレはフィアラルと敵対する組織、ガーディアのメンバーよ。」

近づくにつれて、容貌がだんだんと明らかになってくる。

黒いマントを羽織り、フードまで被っている。腰には・・・鞘。

「やる気ね。明らかに。」

謎の人間との距離が10メートルぐらいに縮まった。

そしてこう言った。

「メアリー・ティーフ、その男は誰だ。妙な魔力を感じる。」

「さあね、あなたこそ誰よ。」

男はフードを取った。男だ。

長髪で、整った顔立ちをしている。身長は180くらいか？
剣を抜いた、バチバチと音を立てている。帯電しているようだ。

「マサヤ、ここは私が何とかする。せめて捕まらないようにして。」
え？捕まる？そう思ったとたん、男が魔物を呼んだ。砂漠から手が
伸びている5本だ。

「ケイファンよ。捕まったらお終いよ。」
ウネウネと寄ってくる砂の手。キモ・・・

「さあ、覚悟はいい？男だから容赦しないわよっ！ヴォルカランス
！」

炎の槍が出現。長物に有利な位置をとる。男はさせまいと、距離を
縮める。そして足を斬りつける。メアリーは飛んでよけつつ、頭部
を貫こうとする。男は右によけ、剣を切り上げる。剣の残像からも
稲妻が見える。

「当たるとまずいわね。」

いったん退いて距離をとり、突きを繰り出す。すさまじい速度だが、
男はそれを、避け、剣で受け流し、すべて回避した。

メアリーは舌打ちした。異世界移動の際に、多くの魔力を消費した
ためか、思ったように力が出ない。男はそれでも容赦なく斬撃を繰
り出す。さすがのメアリーも、全力が出せないのでキツイ。

「どうした？そんなものか？」

「くそっ！」

「俺はガーディア第4部隊隊長、グリフ・モーガンだ。」

「知るかつての！」

槍じゃキツイわね・・・メアリーは槍を手放した。槍は消滅した。

そうね、相手は雷・・・ここは土はない、砂ばかり。何か・・・何

かないか？

そうだ！無属性なら・・・

「エルダージャベリン」

無属性、これは金属ではない。この武器がいつ作られたかは、メアリーも知らない。そこまで古いのだ。グリフが近づき剣を振りかぶる、メアリーは見逃さなかった。正確に腹を突いた。男は不意をつかれ、後ろに吹っ飛んだ。血がポタポタと落ちる。致命傷にはならなかったようだ。メアリーは距離を詰め、追撃しようとしたが、男は咄嗟に立ち上がり、後ろに下がった。そして、

「女が・・・、来い！ボルティジ！」

男の前に魔方阵が現れ、そこから人型の猿が現れた。

「なんだ？グリフ。今回はやばいのか？」

「そんなんじゃない、だが、俺一人じゃ無理だ。頼む。」

「あいよ！」

メアリー、顔が面倒くさそうだ。

猿は拳を帯電させた。「いくぜえ、姉ちゃん。」

「死ね。糞猿が！」

メアリーらしくない言葉を放ち、猿と距離を詰める。だが、グリフが邪魔をする。非常に厄介だ。せめて、魔力が全快ならば・・・とメアリーは考える。

猿の拳が飛んてくる。槍の柄で受け流し、そのまま攻撃に転じようとするが、グリフが斬り込んでくる。これはダメだと後ろに下がる。「ミリシアの魔物はあなたがやったの？」

「ああ、お前らに早く消えてもらうためにな。だが、その小僧、なかなかやるな。今のうちに息の根を止めておきたい。」

「させないわよ・・・！」

一方、昌也は・・・

「チッ！何だこいつら！」

苦戦していた。蹴つても殴つてもすぐに再生するらしい。砂があつてこそだが。

「もつと、圧倒的な攻撃力が・・・そうだ！」

メアリーが使っていた槍を思い出した。できるか？

手に魔力を集中させてみた。しかし、ダメだ。ん？また光った。何だ？

適当にケイファンを蹴り、手に魔力を更に集中させた。すると、パキパキと音を立て、手に変色していった。鉄・・・？鉄かはどうかまだ分からないが、とにかく硬くなっていた。これなら・・・パン！

ケイファンが弾けた。が、再生した。前より小さくなっている。

「へっ！これなら銅の簞手もいらねえや！」

適当に簞手を投げつけ、小さくなったケイファンを蹴る。すると、もう再生はしなかった。

いける。

これに属性が加われば・・・だが今はしょうがない。やるしかない。魔物は残り4体。魔物は何やら見つめ合い、何かを決断したように中心に集まった。そして、融合した。

「おい・・・またかよ・・・」

大きい、10メートルはある、黒い竜より強そうだ。そしてまた手が無数に出てくるだろう。

両手を硬化させた。魔物の形は手そのまま大きくなった感じが。一気に間合いを詰める。魔物はグーの形をとった。殴ってみたが少ししか削れない。防御力が格段に上がっている。その削った砂は再生していない。だが、まだまだだ。

これを繰り返していれば勝てる。そう思った。だが、手は、人差し指を俺に向けてきた。咄嗟に退いた。これは危険だ。人差し指から、圧縮された砂が発射された。なんとかよけた。弾は小さいが速い。手は、中指も俺に向けた。まずい。

人差し指と中指から、無数の弾丸が発射された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0087z/>

異世界の俺の生きる場所

2011年12月2日19時00分発行